

なんでオリンピアが観覧車から飛んだのかずつとそのことばかり考えている。

いや、落ちた、かな？

落ちたと飛んだじや似ているようで全然違う。

落ちるのは重力の法則に殉じた自然現象、飛ぶのは羽ばたく意志。

遊園地の空気は不可視の毒で汚染されている、普通の人間がここに入ったらもがき苦しんで命を落とす。私は大丈夫、人間じゃないから。

オリンピアと最初に出会った時、私はあちこち壊れていた。肩の外装は剥がれて部品が暴かれ、至る所でバチバチ放電し、右足はびっこひいてた。

自殺？ 事故？ どっちでもない。

白い肌で羽織ったネグリジエはズタズタに引き裂かれて、ご主人様が持つてる本に載ってたロールシャツハテストみたいな返り血が飛び散っていた。

私を壊し損ねてがっかりしたご主人様の顔はよく覚えてる。

「なんで一緒に死んでくれないんだアンナ、お前は俺の××じゃないか！」

最後にご主人様はそう叫んだ。

アンナマリア、それが私の個体識別コード前。ご主人様は略してアンナと呼んだ、私の前にいた猫の名前だつて。

私はアンナ。ご主人様は……思い出せないのはエラー？

ご主人様のおうちを出てからずつと歩き続けてる。

高級セクサロイドには帰巢本能がインプットされてる、だからもし迷子になつてもひとりりで帰つてこれるの。だけど私は壊れてるから正常に作動しない。

壊れたら壊れたまんま、ずつと歩いてくしかない。

そうしてびっこをひいて歩いてたら深夜の遊園地に辿り着いた。ご主人様の部屋の窓から恐竜の骨格標本みたいなジェットコースターのレールや巨大な観覧車が見えたのを思い出す。

今はジェットコースターも観覧車も海賊船も闇に沈んでいる。

遊園地の周辺はすつごく静かだった。無人のゲートを通り抜けるとファンシーにデコレイトされたメリーゴーランドやコーヒーカップのアトラクションがでむかえる。どれも動いてない。死んでる……眠つてる？

「あんた迷子？」

声に反応して顔を上げれば綺麗な女の子が立っていた。

腰まである長い髪は毛根が青、先端にかけて水色に染まる不思議なグラデーション。

長い睫毛に縁取られた瞳はオパールみたいな七色の光沢を帯びていた。

その子は私の正面の観覧車、地面すれすれのゴンドラの上に腕を組んで仁王立ちしていた。

「とろいなあ、野良セクサロイドなのかって聞いたんだけど」

「野良……ご主人様がないって事？ だったら野良かも」  
「自分でわかんないの？ 捨てられたんじゃないの？」

女の子の肩が片方吊り上がる。表情の作り方がすごく上手。この子はきつとすごい高級品なんだ。私はほんやりと女の子を見返す。

「ご主人様の生命活動は止まった」  
「なんで？」

「窓を突き破って飛び下りた。事業に失敗したって言うた」

「よくあるパターンね、しょうもな。道連れにされなかつただけラッキーだけ」

地上十階、ネオンの海に背中から落ちてくご主人様を思い出す。

「あ、ちがうか。その壊れっぷり見ると一緒に落ちたけど死ねなかつたってとこ、凶星でしょ。最新型は耐久力すごいもんね、タンクローリーに轢かれても無傷らしいし。名前は何？」

「アンナマリア」

「私はオリンピア、セクサロイド専門の娼館から逃げ出してきたの。ここは私の領地、抜けてくなら通行料とるわよ」

「通行料？」

「現金……はもらってもしょうがないから物々交換でパーツね」

これ以上とられたら困る。だから断った。

「あげられない。ごめんね」

するとゴンドラから下りたオリンピアが高飛車に顎をそらし、きっぱり言いきる。

「じゃあ出さない。永遠に」

オリンピアはそういうけど別にでかく気になればでいい。普通に。

オリンピアは私のご主人様じゃないから命令の権限を持たないし。

私が遊園地にとどまることにしたのは、野良アンドロイドは業者に回収され、スクラップにされてしまうとご主人様

に聞かされていたから。圧縮プレスされる痛みは想像したくない。セクサロイドは原則味覚や嗅覚をもたないけど、痛覚を含む触覚は強化されてるのだ。

「昔……っていつても十年位前だけど、このへんには化学工場があつたの。ある日そこで爆発が起きて、人体に有害な薬品がまき散らされた。今もまだ空気や水が汚染されてるから、人間たちは半径3キロ以内に近寄れないのよ。可哀想に、オープンまもない遊園地はろくにお客さんを入れないうちに廃業しちゃつたつてわけ」

「よく知ってるね」

「そこそこ長くいるしね」

オリンピアは遊園地の至る所に案内し、アトラクションの遊び方を教えてくれた。

「これはコーヒークップ。真ん中の丸いテーブルをぐるぐる回すとカップも動くの」

「何が面白いの？」

「さあ？ 三半規管が攪拌されるから気持ちいいんじゃないかな」

「私たちにはないよね」

「子宮と同じね」

オリンピアは地上に一番近い7番のゴンドラを寢床にしていた。

ドアが開いているゴンドラはこの一個だけだったので、私もお邪魔する。

「シエアとかホントはやなんだけど、しかたないもんね。野ざらしじや劣化が速まるし、最低限雨風しのげたほうがいいでしょ」

「他の子はいないの？ オリンピアだけ？」

「ほかの野良アンドロイドはわざわざ廃遊園地なんかこないよ、倫理プロトコル外れた自立思考ができるだけでもすごいんだよ？」

オリンピアは私より長く稼働してるぶん賢くて、色々な事を教えてくれた。

セクサロイドは本物の女の子に似せて設計されるけど、人間と間違えないように髪や瞳には人工の色が用いられること。

この星の法令じやセクサロイドの自立思考は制限されてるけど、それに違反する技師が絶えないこと。

「なんで違反するの？ 捕まっちゃうのに」

「不感症じや物足りない」

「えーと」

「そっちの方が面白いからでしょ。私やあんたのご主人様

はセクサロイドを単なるお人形として可愛がるだけじゃご不満で、会話らしいものを楽しみたかったのよ。だから二進法反射じゃない学習機能を与えた」

そこでちよつとだけ黙り込み、ゴンドラに嵌めこまれた窓の外を眺める。

「私は経営者のお気に入りだったから、アブノーマルにカスタマイズされたの。他の子たちはみんな従順。お店から逃げ出そうなんて考えないし、手入れが入ったら仲良く廃棄場送りでしょうね」